

トルコギキョウの日長反応及び生育相の品種間差異

沼 宗三・遠山 芳弘・新田 齊

(福島県農業試験場いわき支場)

Varietal Difference in Photosensitivity and Developmental Phase
of Eustoma Cultivars (*Eustoma Russellianum* G. Don)

Sozo NUMA, Yoshihiro THOYAMA and Hitosi NITTA

(Iwaki Branch, Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

福島県におけるトルコギキョウの栽培面積は、年々増加の傾向にある。しかし、毎年のように新品種が育成されているうへ、比較的最近になって導入されたために、栽培上の品種の特性が明らかではない。

トルコギキョウの作型は、秋まき(9~10月は種)栽培と春まき(2~3月は種)栽培とに大別できるが、ここでは、主な品種の生育相や形質などを作型別に把握し、更に春まき栽培では短日処理効果について検討した。

2 試験方法

(1) 秋まき栽培

昭和59年10月19日、“黒峰”ほか9品種を供試し、ペーパーポット(3×3×5cm)を利用しては種した。その後、最低夜温13℃に設定したガラス室内で育苗し、翌年3月17日無加温パイプハウスに定植した。栽植距離は12×12cmの7条植えとし、N・P₂O₅・K₂O各1.5kg/aを施用した。定植後は二重トンネルで被覆して保温した。

(2) 春まき栽培

昭和60年3月11日には種し、6月21日に定植したが、品種その他の耕種については秋まき栽培に準じた。日長処理は春まき栽培のみ行なった。すなわち、6月27日~7月26日の1か月間、午後5:00~午前8:00までの暗幕被覆による9時間日長とした。

(3) 調査方法・区制

切り花時(開花数が2~3輪)における花茎長・節数・分枝数・花らい数・重量などを調査した。区制は、1区70株(約1㎡)反復なしとし、各区30茎を調査した。

3 結果及び考察

(1) 秋まき栽培における開花期・切花形質

開花期は、紫色系で“黒峰”(7月16日)、桃色系で“春の峰”(7月10日)、白色系では“白扇”(7月16日)が最も早く、“ピンクパール”と“ピュアホワイト”の八重咲種についてはこれよりかなり遅れた。品種全般に開花が早いと切花形質(花茎長・重量など)が劣る傾向が認められたが、“黒峰”についてはこの限りでなかった(表1)。

(2) 春まき栽培における開花期・切花形質

開花の早晩性は秋まき栽培にほぼ準じたが、開花は八重咲種を除き45日前後遅れた。しかし、切花形質については一応商品性はあるものの秋まきに比較するとかなり劣り、特に、採花時の節数が著しく減少した。これは、高温・長日条件により栄養生長が不十分のまま花芽分化が促進されたためと考えられる。なお、節間長は作型により異なり、秋まきでは短く、春まきでは長くなる傾向があった。春まき栽培ではおそらく生育盛期の高温による急激な節間の伸長によるものであろう。

一般に、白色系については花茎が折れやすく、特に白扇についてはその傾向が強いので、このような環境条件下における栽培管理については十分な配慮を要する(表2)。

表1 秋まき栽培における開花傾向及び切花形質

花色系	品 種	平均開花日 (月・日±SD)	花 茎 長 (cm)	重 量 (g)	節 数	分 枝 数	花 ら い 数
紫色系	黒 峰	7.16 ± 4.9	73.0	52.4	8.9	3.3	12.1
	福 紫 盃	7.21 ± 5.5	73.4	44.2	9.6	3.1	11.4
	紫 苑	7.23 ± 3.3	68.3	31.9	11.9	3.3	10.1
桃色系	春 の 峰	7.10 ± 2.9	66.6	42.4	8.5	4.0	13.3
	桃 の 誉	7.18 ± 5.4	94.5	76.5	11.0	3.7	14.5
	源 氏 桜 ピンクル	7.22 ± 5.0	92.1	68.0	10.7	3.5	14.1
白色系	白 扇	8. 7 ± 6.7	103.4	84.5	13.1	4.0	21.9
	源氏の雪	7.16 ± 4.3	75.7	46.3	9.7	4.0	14.7
	ピュア ホワイト	7.17 ± 3.6	92.2	89.8	9.3	5.2	18.5
		7.29 ± 8.5	105.1	87.0	10.5	3.7	16.8

(3) 花色・花弁数の変異

1) 花色の変異

八重咲種の“ピンクパール”と“ピュアホワイト”は花色が均一でなく、異色の混入割合が前者で3%, 後者では15%認められた。

2) 花弁数の変異

春まき栽培では、“ピンクパール”と“ピュアホワイト”の八重咲種の花弁数は平均17~18枚であるが、花弁数5枚の一重咲きが“ピンクパール”で35.2%、“ピュアホワイト”では21.4%の割合で出現しており、八重の程度について

ては個体間のばらつきが目立った。また、作型によっても
花弁数は変化し、秋まき栽培で多くなる傾向がみられた。

表2 春まき栽培における開花傾向及び切花形質

花色系	品 種	平均開花日 (月・日±SD)	花 茎 長 (cm)	重 量 (g)	節 数	分 枝 数	花 ら い 数
紫色系	黒 峰	8.31 ± 5.2	64.0	24.2	5.8	2.3	11.0
	福 紫 盃	9. 1 ± 4.9	56.7	26.0	5.8	2.5	9.8
	紫 苑	9. 8 ± 7.0	68.9	27.1	6.2	2.8	12.3
桃色系	春 の 峰	8.26 ± 4.0	63.5	26.3	5.2	2.7	13.0
	桃 の 誉	9. 2 ± 4.2	61.3	25.3	6.7	2.9	11.2
	源 氏 桜	9. 7 ± 6.2	63.7	27.3	6.4	2.7	10.6
	ピ ン ク ル	9. 4 ± 6.1	66.5	31.6	6.9	3.0	12.3
白色系	白 扇	9. 2 ± 4.4	65.2	32.5	5.3	2.8	13.5
	源氏の雪	8.27 ± 3.1	64.0	28.7	5.8	2.3	11.8
	ピョウアイト	9. 1 ± 5.2	66.9	29.8	5.8	2.3	8.9

(4) 日長処理効果

前述のように春まき栽培では切花形質が劣っていたが、
定植より1か月間の短日処理によりある程度向上した。す
なわち、品種にもよるが、処理により花茎長は平均6.5cm、
最高13.4cm(“源氏の雪”)大となった。また、切花重量は
平均8.2g増加したが、特に“源氏の雪”では12.5gと増
加の程度が著しかった。開花期は11日以上、最高で17日遅
れたが、“紫苑”“春の峰”で遅延効果が高く、作期拡大
の意味からも実用的な技術であろう(表3)。

なお、6月27日～7月26日の処理期間は、暗幕密閉によ
り夜温が上昇することが予想されるので、処理時期や方法

については更に検討を要する。

表3 短日処理による開花抑制及び切花形質の向上
(自然日長区に対する増分)

花色系	品 種	開抑 制効 果(日)	花 茎 長 (cm)	重 量 (g)	節 数	分 枝 数	花 ら い 数
紫色系	黒 峰	12	6.4	7.4	0.7	1.6	3.5
	福 紫 盃	14	10.3	10.7	1.7	0.9	1.8
	紫 苑	17	9.4	5.7	1.0	0.3	-0.3
桃色系	春 の 峰	16	8.9	11.4	2.0	1.3	2.0
	桃 の 誉	15	11.4	6.4	0.9	0.2	0.2
	源 氏 桜	11	8.0	9.7	1.9	0.8	2.7
	ピ ン ク ル	11	0.7	5.5	2.2	1.2	1.9
白色系	白 扇	11	10.1	7.3	2.1	1.1	1.9
	源氏の雪	14	13.4	12.5	2.2	1.7	1.5
	ピョウアイト	11	2.1	5.4	1.5	0.5	±0.0
全品種平均		13.2	6.5	8.2	1.6	1.0	1.5

4 ま と め

以上の結果を要約すると、秋まき栽培では紫色系で“黒
峰”，桃色系では“桃の誉”“源氏桜”，白色系では“源
氏の雪”が実用的であり、春まき栽培でもほぼ同様な傾向
が認められたが、紫色系では“黒峰”より“紫苑”が優れ
ていた。

これらの品種は、短日処理により開花を抑制することが
でき、切花形質を向上させることが確認された。